

生態地理学上注目すべき長崎県の植物群落

伊藤 秀 三

Syuzo ITOW: Ecogeographically noteworthy plant communities in Nagasaki Prefecture, Japan.

まえがき

1967年に長崎大学に赴任してきてから、28年半が経過した。この期間、私は県下の九州本島部ならびに島嶼部の植物群落を広く調査する機会に恵まれた。その機会とは、文部省の科学研究費補助金によって与えられた機会であり、また1970年代から80年代にかけて行われた環境庁の企画による自然環境保全調査にいく度も参画したこと、加えて長崎県文化財審議会の委員としての現地調査の機会が与えられたこと、1990-1992年には県自然保護課の企画による無人島調査に参加したことによる。もともと、私個人の自然志向の旅好きという性癖もあって、個人的な植物群落調査の機会をも数多く作った。幸い、こうして与えられた現地調査の機会には、同行者に恵まれた。調査探訪した箇所の中には、すでに保護保全されている群落地も数多くあった。加えて、まだ保護保全されていない群落地にも遭遇した。

こうした経緯経験から、各種植物群落の保護保全を将来進めていくべきと考えてきた。群落の学術的な重要性に関しては、植物天然記念物の評価項目がある（本田ほか1955：文化財保護委員会告示等第二号1951）。それには13の項目があり、そのうち群落または個体群に関する6項目に天然保護区域を加えて、本稿では次の7項目を考慮に入れた。1. 社叢、2. 原始林、3. 特殊岩石植物群落、4. 海岸植物群落、5. 著しい植物分布の限界地、6. 絶滅に瀕した植物の自生

地、7. 天然保護区域。

1978年度と85年度の環境庁自然環境保全調査における特定植物群落の調査においては、8つの選定基準が示された。それらは次の通りであった。A. 原生林かそれに近い自然林、B. 稀な群落または個体群、C. 北限、南限、隔離分布の群落または個体群、D. 砂丘・断崖地・塩湿地・湖沼・湿地・高山・石灰地など特殊立地の群落、E. 郷土を代表する群落、F. 長期間人為を受けていない植栽林、G. 都道府県内で極端に少なくなるおそれのある群落または個体群、H. 学術上重要な植物群落。特定植物群落調査で取り上げられた群落のすべてが本稿に取り上げられてはいないが、かなりの数が重複する。

私はかつて「自然保護上留意すべき植物群落の評価に関する研究」（環境庁）の中で、群落重要度の基準（伊藤1980）を提唱したことがある。本稿でも、そのときの考えを引き継いでいるので、以下に略記再録しておく。

植物群落を言う場合には、抽象名詞としての「群落名（群集名）」と現実の「群落地」を指す場合の二様がある。この見方は、抽象名詞としての「種」とその種の特定の「標本」を指す場合と同じである。群落地というのは抽象名詞ではなくて「群落の標本」を指す。その貴重性の判定には次の2点が考慮されるべきである。

1は、種組成の完全性である。群落地の重要性を判断するのに、群落（群集）や群団～群綱の標徴種のすべてを備えているかどうかを基準にするのである。同じ群集に帰属する群落地であ

っても、組成が完全にそろっている場合とそうでない場合は、群落地としての重要度が異なるからである。2は、貴重種（絶滅危惧種や危急種など）が生育する群落地かどうかである。

本稿では、これらの基準を考慮し、次の3点の選定基準をたてた。すなわち、1：県内における群落地の希少性、2：群落地の種組成の完全性、3：貴重種の存在である。（貴重種は、我が国における保護状重要な植物種および植物群落の研究委員会植物種分科会1989による）

1992～95年には、自然保護協会沼田真会長の主導のもとで、全国的な保護すべき植物群落地の登録作業が行われ、私は九州ブロックの世話人として検討委員会に参加し、また長崎県の調査員も務めた。このときの結果は、「植物群落レッドデータブック」（我が国における保護状重要な植物群落の研究委員会1996）として出版されている。そこに登録された長崎県の群落地は、当然、上記の基準に照らしつつ、本稿にもリストされている。

以上の経過によって長崎県下の生態地理学上注目すべき群落を拾いあげた。これらには当然、国または県指定の天然記念物が含まれる。それらについても、本稿のリストのなかに入れてあるが、既指定地については既に多くの報告や記録があるので（外山1980；長崎県教育委員会1995）、群落の現状については詳しくは記述していない。本稿に収録した全群落地の記述の末尾には、最も新しい調査年月日をカッコ内に記した。日付が2つ以上ある場合は、前の日付は主な調査日を示している。

私の調査対象としての偏りのために、森林群落は多くリストされたが、湿地や池塘群落には多くの見落としがある。これらは、その方面に詳しい人のリストアップに待ちたい。また上述の経緯から、半自然植生と言われる二次林や草原は、特別な例をのぞいては本稿に出てこない。これらも学術上は重要であり、保護保全の対象

に値するが（伊藤1996a）、前述の基準に照らした場合は浮かび上がって来ない。このことに関しては、別の視点からの検討が必要である。

将来、長崎県では保護保全すべき植物群落レッドデータブックの取りまとめ作業が行われなければならない。本稿がそのときの資料となることを願う。同学同好の方々が本稿に続いて、同様の原稿を執筆されることを切望する。

保護保全には、いろいろなやり方がある。なるべく人為を遮断した硬い保護から、一般市民が直接に群落に立ち入り触れながら保全して行く方法まで、硬軟の方法がある。どのやり方が適切かは個々の群落地によって異なるであろう。それには本稿では触れない。制度的には、県または市町村レベルの天然記念物に指定するのが良いと考えている。そのうえで、硬軟いずれかの方法で保護保全するか具体策をたてるのが良い。言うまでもないが、本稿にリストしなかった自然地、自然群落にも保護保全の対象となるべきものが数多くある。ここに挙げたのは、どこまでも県下全域を見渡して、前述の基準、特に希少性に照らして学術上注目すべきものを取り上げたのであって、他所にも数多くの保護保全の対象物があることを付記しておく。

本稿の基礎となったのは、私自身の現地調査である。故外山三郎氏（長崎大学教授、同名誉教授、1990年没）とは一緒に現地調査の回数は少ないが、県下全般の植物分布について数多くの貴重なご教示と示唆をいただいた。それが私の調査の継続の励みにもなった。故人の霊に深く感謝の意を捧げる。私は単独行の調査も行ったが、数多くの調査では同行者に支えられた。そのすべての方々の名前は、リストとして私の手元にある。それをここに記すと、紙数は数頁以上を必要とするであろう。個々人のお名前をここに記すことは出来ないが、これらの方々の協力に感謝の意を述べたい。とくに次の4氏は、現地調査に多くの日数を同行し協力して下

さった。川里弘孝（長崎県雲仙公園管理事務所），中西弘樹（長崎女子短期大学），松岡数充（長崎大学教養部），千々布義朗（長崎県自然保護課）（カッコ内は現所属）。この4氏の永い年月にわたるご協力に，厚くお礼を申し述べる。

本稿は2編に分けて本誌に載せる。今回が島嶼編で次回が本土編である。

対 馬

1) 鰐浦ヒトツバタゴ自生地（国指定天然記念物）（上県郡上対馬町鰐浦）（図2）

ヒトツバタゴは大陸系植物といわれ，日本では対馬北端の鰐浦と中部地方数カ所に隔離分布する。鰐浦ではコナラ-ノグミ群集の中に生える。生育密度は高く，よく更新している。（1990/5/3；1995/5/9）

2) 上対馬町のハマニンニク群落（上県郡上対馬町勝本の三宇田浜および泉の浜）（図3）

冷温帯以北系のハマニンニクの南限地のひと

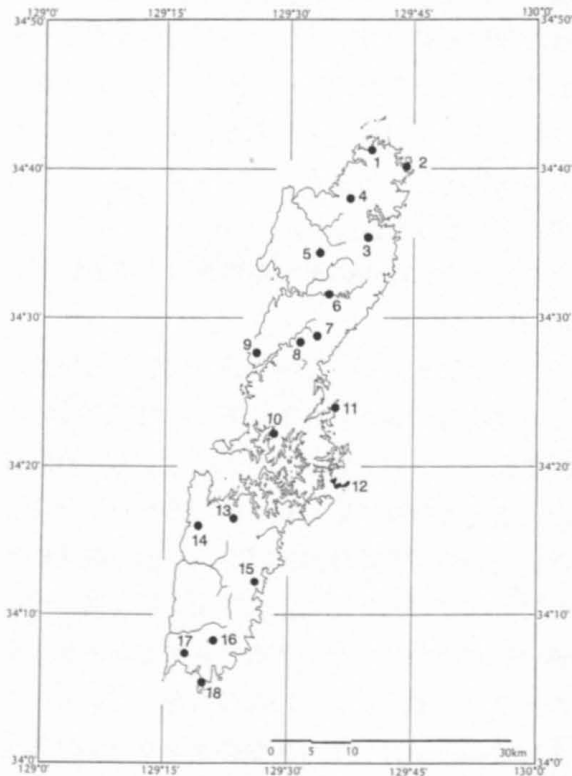


図1 対馬概念図

各地点の番号は本文中の番号に対応する。



図2 鰐浦のヒトツバタゴの開花期の景観
（1995/5/9撮影）



図3 三宇田浜のハマニンニク群落
（1978/7/16撮影）

つである。最南限は博多湾にあったが，それはすでに消滅した。現在，九州に残る唯一の自生群落地である。勝本三宇田浜（海水浴場）の一隅と，泉の南方の3つの砂浜にある。盗掘の対象になる植物ではないが，保護保全すべき分布限界地である。群落組成の詳しいことは中西（1986）を参照されたい。（1978/7/16）

3) 舟志川の低地性モミ林（上県郡上対馬町舟志川屈曲点3箇所）（図4）

モミ林には高地性と低地性があり，前者は対馬では御岳と白岳（後述）の山頂部にある。低地性モミ林は全国的にも殆ど開発され尽くして残存林が無い。対馬においても各地に存在したらしいが，まとまって残るのは舟志川沿いだけである。河川の屈曲点の内側にあり，面積はいずれも数ヘクタール以下である。全国的にも例



図4 舟志川の屈曲点の低地性モミ林。モミ-シキミ群集ウラジログシ亜群集 (1988/8/22撮影)

のない群落で、価値が極めて高い。植物社会学上はモミ-シキミ群集ウラジログシ亜群集に相当する。組成の詳細は伊藤(1973, 1974)を参照せよ。現在「カエデ類保護区」と称されている。保護保全には万全を期したい。(1973/8/25; 1988/8/22)

4) 上県町佐須奈 嶋大国魂御子神社の巨木群と社叢 (上県郡上県町佐須奈)

この神社の境内には、下に列記する樹種の巨木がある。これらの巨木が揃ってここに存在する理由は明らかではないが、地元住民の何代にもわたる保護の賜物であろう。日吉の大杉(俗称:天狗杉)根回り628cm, 幹回り589cm。鳥居の背後、石段のすぐ脇にある。高さは38mと言う。ムクロジ:根回り398cm, 幹回り339cm。石段の中途、右側にある。県下最大のムクロジの巨樹。樹勢は良い。以下はいずれも拝殿の右方〜後方にある。数字は根回りと幹回り。カヤ:271cmと252cm。カゴノキ:194cmと155cm。ウラジログシ:278cmと270cm。ケヤキ:360cmと319cm。ケヤキ:411cmと372cm。イロハカエデ:221cmと207cm。クスノキ:399cmと268cm。ウラジログシ:499cmと424cm。ムクノキ:244cmと217cm。これらのうち特記すべきはスギとムクロジの巨樹である。後者の巨大さは他に例を見ない。またこの神社の社叢は、対馬北部丘陵地の自然林の形態と種類組成をよく残している。巨木群と

ともに社叢全体が保護に値する。(1990/10/8)

5) 上県町御岳のモミ林 (上県郡上県町)

御岳の頂上部は国指定の天然記念物「御岳鳥類繁殖地」である。その指定区域のなかには、極めて自然度の高い日本最西端のモミ林が残存する。モミ-シキミ群集アカガシ亜群集。記念物としては動物の繁殖地として指定されていて、モミ林は指定理由とはなっていないので、ここに挙げることにした。(組成は長崎県教育委員会1993a, 83-89頁参照)(1978/7/17; 1988/5/28)

6) 対馬のチョウセンヤマツツジ自生地

(上県郡上県町御岳1988/5/28, 上県郡上県町飼所川1988/5/27, 下県郡美津島町金田城1990/5/4; 1995/5/10, 同白岳1995/5/11, 同竜良山1990/10/10-11)

チョウセンヤマツツジは朝鮮半島および済州島にはひろく分布するが、わが国では対馬の数カ所に自生地があるだけである。その自生地には、山頂の岩角地と河岸とがある(伊藤ほか1993; 金・伊藤1994)。本種の対馬における自生は、朝鮮半島と日本をつないだ対馬陸橋を示唆する点で貴重であり、わが国では稀少である。今後も新産地の発見が予想されるが、そのすべてが保護保全の対象となるべきである。まとめてここに挙げた。

7) 峰町大星山のケヤキ群落 (上県郡峰町大星山)

ケヤキ群落は県下の山地の溪流沿いに発達する(発達していた)群落である。県下全域で伐採や開発のために群落としてはほとんど消滅した。本土に残っていた島原市千本木のケヤキ群落(長崎県教育委員会1991b)、雲仙の噴火により1993年頃に消失した。大星山の溪流沿いには、道路開発のためにやや変形されているが、まだ自然度の高いケヤキ群落が残存している。ここには県下では自生の少ないケグワ(クワ科)と自生と思われるヤマナシ(バラ科)も生育する。詳しい調査を必要とするが、保護保全すべ

き群落である。(1973/8/24; 1979/5/29)

8) 対馬三根川のアキニレ群落 (上県郡峰町三根川河岸) (図5)

アキニレはニレ科の落葉性の中高木で、分布は県下全域におよび、河辺の湿性地に群落をなす。このような立地はすでに人為的に改変・開発されていて、アキニレの自然群落は残っていない。西日本全体を見ても、自然度の高い残存林は、この地だけであろう。河辺環境が開発されて行くなかで、川岸300メートルにわたって残っている。かつて仁田川河口にもあったが消滅した。(1990/10/9)



図5 三根川河畔のアキニレ群落(1990/10/9撮影)

9) 対馬海神神社の社叢 (県指定天然記念物) (上県郡峰町木坂)

10) 豊玉の和多都美神社社叢 (県指定天然記念物) (上県郡豊玉町仁位)

両地ともに対馬の照葉樹林の原型をよく残している。一般的に言えば、緩傾斜地にはスダジイ-ホソバカナワラビ群落、乾きやすい尾根筋にはスダジイ-ヤブコウジ群落がある。組成は伊藤(1977a)を参照せよ。(1978/7/18-19)

11) 豊玉町長崎鼻のカシワ群落 (上県郡豊玉町長崎鼻)

冷温帯性のカシワは、日本海の海岸沿いの分布では、対馬、壱岐、生月島、平戸島を経て、五島列島福江島の南端、玉之浦まで南下分布する。群落状態では、ここにあげる長崎鼻の群落

がもっとも自然度がたかく、かつ群落としての組成的なまとまりがよい。組成は伊藤・中西(1987)を参照せよ。植物社会学的には、カシワ-ネムノキ群集である。この群集は県下の他所にも若干は存在するが、この地のが典型的である。(1978/10/20; 1983/11/21)

12) 美津島町黒島の全域 (下県郡美津島町) (図6, 7, 8)

本島は、対馬中央部の東側、三浦湾の湾口部に位置し、東西2.5km、最大幅1.4km、L字型をした面積1.02km²の無人島である。くびれの内側には砂浜が発達し、外海側には海食崖が発達する。ここには多様な立地に各種の植物群落が自



図6 美津島町黒島の砂浜群落

①オカヒジキ-ハマヒルガオ群集, ②コウボウムギ-ハマグルマ群集およびハマグルマ-オニシバ群集, ③ハマゴウ-チガヤ群集, ④この手前にハイビャクシン-ハマゴウ群集, ⑤ハイビャクシン-ダルマガキ群集, ⑥ハマビワ-オニヤブソテツ群集, ⑦クロマツ群落(1984/8/10撮影)



図7 黒島のキシゲ群落(1984/8/10撮影)

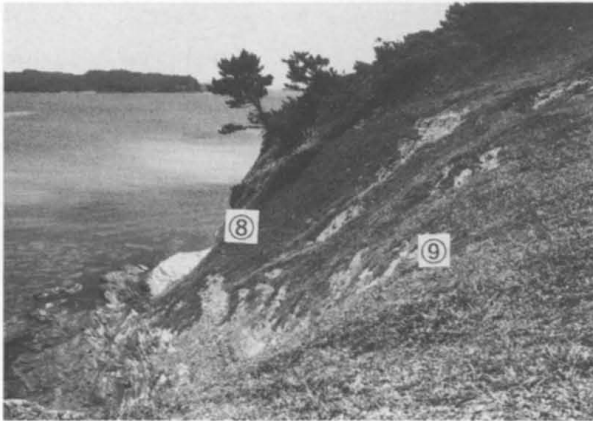


図8 ⑧ハイビャクシン-ダルマガキ群集, ⑨ダルマガキ-ホソバワダン群集 (1984/8/10撮影)

然度高く発達している。主な群落, 砂浜群落: オカヒジキ-ハマヒルガオ群集, コウボウムギ-ハマグルマ群集, キスゲ群落, ハマゴウ-チガヤ群集, ハイビャクシン-ハマゴウ群集, 崖地群落: ハイビャクシン-ダルマガキ群集, ダルマガキ-ホソバワダン群集, ハクウンキスゲ群落。なおハイビャクシンは対馬陸橋域で分化した種で, 韓国の南西側島嶼, 壱岐, 沖の島(福岡県), 馬渡島(佐賀県), 五島の美良島に分布する(伊藤・川里1980)。対馬は本種の分布の中心であるが, 対馬ではまだ保護保全の対象となっていない。黒島は島全体の自然景観が勝れており, 植生の自然度はたかい。ハイビャクシンだけでなく, 黒島全体が保護保全の対象として取り上げられるべきである。植生の詳細については伊藤ほか(1986), 長崎県教育委員会(1991a, 148-155頁)を参照せよ。なおハイビャクシンだけについて言えば, 対馬では北端部・北東部の海岸と属島, 東海岸の鴨居瀬の海岸と属島, 長崎鼻にも自生し, いずれも注目すべき群落地である。(1978/7/20; 1984/8/10; 1988/8/24; 1995/5/10)

13) 洲藻白岳原始林 (国指定天然記念物) および洲藻白岳のモミ林 (下県郡美津島町白岳) (図9, 10)

洲藻白岳の山頂部は国指定の「洲藻白岳原始林」である。そこにはアカガシ-ミヤマシキミ群集の原生林と山頂岩角地群落(イワシテ-ツシマ



図9 洲藻白岳原始林 (国指定の天然記念物)。森林はアカガシ-ミヤマシキミ群集, 山頂の石英斑岩の岩角地にイワシテ-ツシママンネングサ群集, ダンギク-イワヒバ群集, チョウセンヤマツツジ群落, チャボツメレンゲ群集がある (1990/11/24撮影)



図10 白岳原始林の南端の2等三角点の南尾根の西側にあるモミ-シキミ群集アカガシ亜群集。日本最西端のモミ林である (1990/11/24撮影)

マンネングサ群集, ダンギク-イワヒバ群集, チャボツメレンゲ群集, チョウセンヤマツツジ群落, ハクウンキスゲ群落等) がある。その指定地の南端に海拔515mの二等三角点があり, そこから南にのびる尾根上で指定地の外にモミ林がある。それは日本最西端のモミ林であり, 自然度は極めて高い。典型的なモミ-シキミ群集アカガシ亜群集。組成は長崎県教育委員会(1991a, 69頁)を参照せよ。(1990/11/24; 1995/5/4)

14) 阿連の雷命神社のムクロジ個体群 (下県郡厳原町阿連)

ムクロジはムクロジ科の落葉樹で, 本州中南部, 四国, 九州, 中国, 琉球, 台湾, インドに

分布する。種子は球状で径1cmの大きさがあり、かつてはそれから念珠が作られた。こうした経緯から、わが国での生育すべて自生か否かは検討を要する。対馬には本種の大木が多い。とくに阿連の雷命神社社叢には径70cm級の大木が数多く生育する。このような群落は他所では知られていない。またこの社叢にはカヤの大木(DBH1m級)も多い。「対州神社誌」によると、雷命神社では「框を神木にした」旨の記述があるそうである(1983年の共同調査者の千々布の私信1983による)。この記述からみても、ムクロジやカヤが生育する社叢がながく存在したことは明らかである。組成は伊藤・中西(1987)を参照せよ。学術的価値からも、将来にわたって保護保全を続けていきたいものである。(1983/9/1; 1993/9/2)

15) 厳原町 八幡神社の社叢 (下県郡厳原町)

この樹叢は、植生学的にはスダシイ-ホソバカナワラビ群集が主体をなす森林である。自然性は高い。特記すべきは、この樹叢にはクスノキ(多数, 最大幹囲: 約650cm), タブノキ(幹囲: 505cm), カヤ(幹囲: 約430cm)の大木が見られることである。(1983/11/22)

16) 龍良山原始林 (国指定天然記念物) (下県郡厳原町内山)

龍良山(海拔559m)の北側斜面に、海拔120mから山頂まで、スダジイ-ヤブコウジ群集、ウラジログシ-イスノキ群集、アカガシ-ミヤマシキミ群集が連続して広がる、きわめて自然度の高い森林である。山頂部には少量ながらチョウセンヤマツツジが自生する。ここの森林植生に関しては多面的な生態学研究が続けられてきたし、今も継続している。主な文献は次の通り。(伊藤 1992; 伊藤ほか1992, 1993) (1981/10/10-14; 1989/10/8-10; 1991/10/6-10; 1994/11/25)

17) 豆酏多久頭魂神社の社叢 (下県郡厳原町豆酏)

「龍良山原始林」には海拔120m~山頂570メートルにわたり(上述)、極めて原始性の高い森林が保護され、山地中腹のスダシイ林から頂上のアカガシ林までが連続して見られる。しかし低海拔の森林はない。その欠落部分を補えるのが、ここに挙げる社叢である。その森林組成は明らかに龍良山とは異なる。植生学的にはスダシイ-ホソバカナワラビ群集に相当するが、暖地性要素(例: ホルトノキ)を多く含み、壱岐以南の森林に似ている点において、対馬の他の地域の森林とはかなり異なっている。自然度は高い。付記: 神社拝殿のよこにタチバナの植栽木がある。(1983/9/2; 1993/9/1)

18) 神崎のナタオレノキ群落 (下県郡厳原町神崎半島)

ナタオレノキ(モクセイ科)は、本県ではなぜか島嶼にだけ分布する。南は男女群島から五島列島各地と平戸島と阿値賀島、沖の島(福岡県)に点在し、対馬では南端部の神崎に群生する。群落優占種は本種で、ほかにヤブツバキ、ヤブニッケイ、ハマビワをまじえ、林床にはテイカカズラ、ノシラン、ヤブランが多い。他所では見られない群落である。組成は伊藤・中西(1987)を参照せよ。(1978/10/23)

壱岐・生月・平戸

19) 勝本のハイビャクシン群落 (県指定天然記念物) (壱岐郡勝本町天が原)

20) 辰の島海浜植物群落 (国指定天然記念物) (壱岐郡勝本町辰の島)

両者ともにハイビャクシン群落が保護の主要な対象である。なお辰の島の群落は野生の鹿の食害のため壊滅的な打撃を受けている。(1978/7/12-13; 1992/10/12; 1996/3/23)

21) 勝本町男岳の照葉樹林 (壱岐郡芦辺町男岳)

壱岐の高地に残存する唯一の照葉樹林である。自然度はやや落ちるが、他に替わるべきものが



図11 壱岐・生月・平戸・五島列島の概念図。各地点の番号は本文中の番号に対応する。

ない。優占種はイスノキ。(1973/8/20)

22) 壱岐白沙八幡神社社叢 (県指定天然記念物) (壱岐郡石田町筒城中触)

壱岐島の低地自然林の原型をよく残している社叢。群落はタブノキ-ムサシアブミ群集とスダジイ-ホソバカナワラビ群集の移行形。種組成は伊藤 (1977a) を参照。(1975/5/8; 1983/8/31)

23) 壱岐志原のスキヤクジャク群落 (県指定天然記念物) (壱岐郡郷ノ原町志原)

隔離分布する南方系のシダ, スキヤクジャクの北限自生地。竹藪わきの溝に沿って自生する。(1978/7/14)

24) 壱岐の鏡岳神社の社叢 (県指定天然記念物) (壱岐郡郷ノ原町初山)

壱岐島の南端にある照葉樹林。ギョクシンカ (アカネ科) の分布北限地。(1983/8/31)

25) 生月のコウシュンシバ群落 (北松浦郡生月町拝野海岸)

南方系の海岸生のコウシュンシバの自生北限地。本種は従来コウライシバと混同されていたが, 1994年夏, この地で本種と確認された (東北大/庄司舜一私信1994; 中西1996a)。群落組

成は伊藤 (1996b) を参照せよ。ほかに県下では有川町で見つかっている (中西1996b)。また同町塩俵ほかでは稀産種ゲンカイミミナグサが生える海岸崖地群落もある。群落組成については伊藤 (1996b), 分布については中西 (1993) を見よ。(1995/10/12)

26) 黒子島原始林 (県指定天然記念物) (平戸市黒子島) (1983/7/19)

27) 平戸の沖の島の樹叢 (県指定天然記念物) (平戸市紐差) (1983/8/21)

28) 志自岐神社地の宮, 隠岐の宮社叢 (県指定天然記念物) (平戸市野子町宮の浦) (1994/6/9)

上記の3地区の森林は, 平戸島の低地の自然林: タブノキ-ムサシアブミ群集 (沖の島ではスダジイ-クチナシ群落) とハマビワ-オニヤブソテツ群集をよく残している。

29) 平戸安満岳のアカガシ自然林 (平戸安満岳) (図12)

安満岳は海拔514m, 平戸島の最高峰である。その頂上部には海拔430m以上に自然度の極めて高いアカガシ自然林が残存する。アカガシ林は九州の照葉樹林域の上部に成立する森林で, この海拔帯では広く植林地化されてきたため, 残存林は極めて少ない。安満岳の残存林は極めて貴重である。植物社会学的にはアカガシ-ミヤ



図12 平戸島の最高峰, 安満岳。山頂部には自然度の高いアカガシ-ミヤマシキミ群集がある (1990/10/28撮影)

マシキミ群集。組成の詳細は伊藤・川里 (1992) と伊藤・真辺 (1992) を参照せよ。(1974/8/29; 1986/11/5)

30) 平戸礫岩の岩石地植物群落 (県指定天然記念物) (平戸市大志佐町)

凝灰角礫岩からなる岩山で、大陸系植物、隔離分布種、岩石地植物、平戸固有種 (イトラッキョウ) が集中して生育し、特殊な群落を形成している。植物社会学的には、イワシデ-ツシママンネングサ群集、ダンギク-イワヒバ群集が中心をなす。同類の岩角地は佐志岳 (1987/11/1) や奥谷 (同) にもあり、少しずつ出現種が異なり、ともに保護保全すべき場所である。詳細は伊藤 (1992) を参照せよ。(1978/11/6; 1988/11/4)

31) 阿値賀島 (国指定天然記念物) (平戸市早福町)

天然保護区域として島全体が保護されている。分布状注目すべき植物: ビロウ, イソヤマアオキ, ナタオレノキ, ミヤコジマツヅラフジ, 鳥類: オオミズナギドリ, カラスバト。(1973/7)

32) 九十九島大島と人頭島のハマジンチョウ群落 (鹿町町大島および人頭島)

南方系の海岸植物ハマジンチョウの分布北限地は、従来、瀬尻島であった。その個体群は1994年に枯死した。93年の異常干ばつが原因かもしれないと言う。その枯死木は1995年の調査時に確認できたが、ほかに生存個体もなかった。この島からは消滅したことになる。瀬尻島から4 km南方の大島と人頭島の4カ所で、生育を確認できた。そこが分布北限地となる。ここでは小さな入り江奥に自生している。周辺には廃船や養殖筏が放棄されていて、調査時には良好な環境では無かった。保護保全のためには、まず周辺の整備が必要であろう。(鹿町は九州本土側にあるが、ハマジンチョウの記述がすべて島嶼部にあるので、ここに挙げた。)(1995/9/11)

五島列島・男女群島

33) 宇久島大浜の砂浜植生 (宇久町大浜) (図13)

宇久島の北東側に大浜海岸がある。ここでは砂浜植生が長さ600mにわたって続いている。夏には若干の海水浴利用があるが、他所に比べて砂浜植生全体の自然度は高い。主な群落は、オカヒジキ-ハマヒルガオ群集, コウボウムギ-ハマグルマ群集, ケカモノハシ-ハマグルマ群集, ハマゴウ-チガヤ群集である。大浜の北側にある海岸崖地にはダルマガク-ホソバワダン群集がある。また浜の背後は放牧地となっていて、そこには典型的なシバ-ツボクサ群集がある。(1986/7/19)



図13 宇久島の大浜海岸。ここには攪乱の少ない自然海岸がある。コウボウムギ-ハマグルマ群集 (1986/7/19撮影)

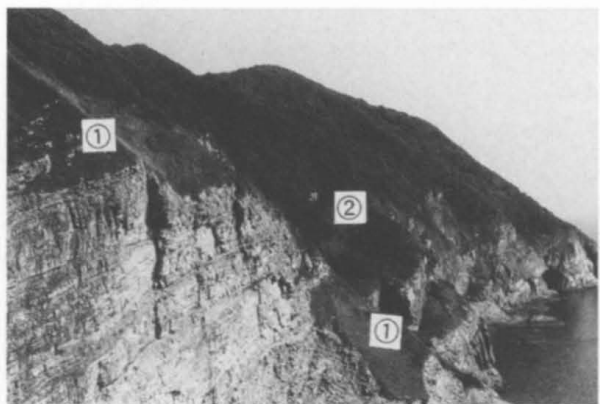


図14 小値賀町美良島の南東側崖地海岸
①ハイビャクシン-ダルマガク群集, ②ハマビワ-オニヤブソテツ群集 (1978/7/26撮影)

34) 美良島(県指定天然記念物)(小値賀町美良島)(図14)

美良島には、九州西部の島嶼の植物群落が一通り見いだされる。モクタチバナ群落、ハマビワ-オニヤブソテツ群集(ビロウ自生)、ハチジョウススキ群落(ヒゴタイ自生)、ホソバワダン-ダルマガク群集(ハマトラノオ自生)が自然度高く発達している(川里・千々布1989)。加えて、対馬陸橋域起源のハイビャクシンの分布南限地で、南東側の海岸崖地にハイビャクシン-ダルマガク群集が広く発達する。天然保護区域として、全島が天然記念物に指定された(指定日1993年2月24日)。(1978/7/26; 1990/8/8)

35) 若松町日の島のハマジンチョウ群落(南松浦郡若松町日の島曲崎)(図15)

現在、日の島曲崎は有福島と堤防でつながっている。ハマジンチョウ群落は曲崎の内側にある。その長さは100m以上に及び、間違いなく日本最大の群生地である。この曲崎は波が運んで来た礫石が堆積して出来たもので、ハマジンチョウ群落のすぐ背後には数か所に墓場が置かれている。その周辺はハマビワ-オニヤブソテツ群集となっている。ハマジンチョウ群落の前の海には、いくつもの廃船は放置されていて、周辺環境は必ずしも良くない。保護保存のためには、周辺環境の整備が前提である。(1976/7/27;



図15 若松町日の島曲崎のハマジンチョウ群落。
廃船や放棄された養殖筏が気になる
(1976/7/27撮影)

1988/3/9)

36) 奈留島皺の浦のハマジンチョウ群落(県指定天然記念物)(奈留町大串浦)

海跡湖の湖岸に自然度の高いハマジンチョウ群落が発達している。周辺には塩湿地植物：ハマボウ、シオクグ、シバナも生育する。(1988/9/7)

37) 奈留島権現山樹叢(国指定天然記念物)(奈留町浦郷)

五島の丘陵地の代表的な自然林。スダジイの優占するタブノキ-ムサシアブミ群集。組成については長崎県教育委員会(1991b, p.103)を見よ。(1988/9/8)

38) 船廻神社社叢(県指定天然記念物)(奈留町船廻郷)(図16)

五島の低平地の代表的な自然林。スダジイを欠きナタオレノキが優占するタブノキ-ムサシアブミ群集。同類の群落の残存林は極めて少ない。組成については長崎県教育委員会(1991b, p.102-103)を見よ。(1988/9/8)

39) 久賀島のツバキ原始林(県指定天然記念物)(福江市久賀島田ノ浦)(図17)

久賀島では昔からツバキ油の生産が盛んであった。自然林の中に生育するヤブツバキを切り残して純林に仕立てた群落を、島内各所で見ることができる。指定地は海に面する約1ha。こ



図16 奈留町船廻神社社叢(県指定の天然記念物)。
ナタオレノキが優占するタブノキ-ムサシアブミ群集
(1988/9/8撮影)



図17 久賀島のヤブツバキ林。他の樹種は伐採されてヤブツバキ優占の群落ができた
(1989/2/11撮影)

こでは幹囲60-70cm, 樹高7m, 林床にはフウトウカズラ, ツワブキが優占する。組成の詳細は長崎県教育委員会(1991, p.95)を見よ。(1989/2/11)

40) 久賀島のタチバナ自生地 (福江市久賀島の3地点) (図18, 19)

タチバナは日本固有のミカン科の植物で, 県下の離島, 本土各地に生育の記録はある。実見したものを記すと次の通り。対馬上県町志多留に植栽木4本, 対馬厳原町豆殿に植栽木2本, 平戸島(志々伎神社と大野)の2本は自生か植栽か不明, 島原半島加津佐町岩戸山の自生は消



図18 久賀島猪木のタチバナ自生木
(1989/2/11撮影)



図19 タチバナの果実
(1989/2/11撮影)

滅して現存は植栽木1本, 福江島玉之浦町白鳥神社の自生は消滅。久賀島では昔から各所にタチバナの自生が知られていたと言われるが, 実情は不明であった。猪ノ木の海拔60mの山中にある個体は, 小さな谷のすぐそばに生えていて, 周辺環境から自生と判断される。根元幹囲75cm, 地上30cmのところで5本の枝に分かれる。それらの直径はそれぞれ12cm, 7cmのもの3本, 5cmであった。果実もつけていた。周辺一帯の保全が必要である。ほかに島内2地点でタチバナらしきミカン科の木本をみたが, 果実がなく確認出来なかった。(1989/2/11)

41) 戸岐神社の社叢 (福江市戸岐)

海岸に続いて平坦な神社前の広場があり, 神社のすぐ背後の南向き斜面にのこる照葉樹林である。地形全体の平均的な傾斜角度は25~30度, 海拔は40メートルである。林冠の主木はタブノキ, スダジイ, ホルトノキ, イスノキで, 樹高は20メートルに及ぶ。林内の自然性は高く, 五島南部の低海拔の丘陵斜面にかつて存在した森林の原型をよく残している。スダジイの優占するタブノキ-ムサシアブミ群集。林床には常緑草本: アオノクマタケランやノシラン, 常緑シダ: オオイワヒトデ, カツモウイノデ, コクモ

ウクジャクが生育する。組成の詳細は長崎県教育委員会(1991b, p.93)を参照せよ。(1988/12/1)

42) 岐宿町のタヌキアヤメ群落(県指定天然記念物)(南松浦郡岐宿町寺脇ほか)

指定地でのタヌキアヤメの自生は非常に減少している。上記の指定地とは別に、タヌキアヤメの自生が2個所で認められている。一つは福江市の翁頭公園の溜池脇にあり、もう一つは岐宿町にある。後者は清水の涌きでる山裾に小面積(およそ幅4メートル、長さ25m)に群生する。群生密度は1㎡に40本程度であった。タヌキアヤメは、指定地であろうと指定地外であろうと、日本列島の自生の分布北限に当たり、いずれも貴重な存在である。その保護保全は長崎県にかかっている。特定の地点を定めず、全自生地を保護すべきであろう。(1988/12/1)

43) 巖立神社社叢(県指定天然記念物)(南松浦郡岐宿町岐宿郷)

社叢の面積は小さいが、町中に残る森林としては自然度が高い。残存林の少ないナタオレノキ優占の森林で、植物社会学的にはタブノキ-ムサシアブミ群集。(1988/12/1; 1993/8/3)

44) 白鳥神社社叢(県指定天然記念物)(南松浦郡玉之浦町矢の口郷)

福江島南部の低海拔丘陵地の原植生をいまによく伝える自然度の高いタブノキ-ムサシアブミ群集である。(1979/7/26; 1993/8/3)

45) 玉之浦町岩谷山のアカガシ林(南松浦郡玉之浦町岩谷山頂上部)

岩谷山の山頂部、海拔350メートル以上の地に、自然性の高いアカガシ林が残存している。下方はヒノキの植林地である。山中、海拔380メートルには岩谷観音の祠がある。海拔370メートルで調べた森林組成は下記の通りであった。〔高木層：12m〕イスノキ2.3, アカガシ2.2, 〔亜高木層：7m〕シロダモ1.1, イヌガシ1.1, 〔低木層：2m〕イズセンリョウ1.2, (以下1.1) ヤブ

ニッケイ, ジュズネノキ, ヤブツバキ, イヌガシ, (以下+) カゴノキ, タブノキ, ツルグミ, モチノキ, イヌビワ, ネズミモチ, カクレミノ, クロキ, シロダモ, ヒサカキ, バリバリノキ, 〔草本層：0.8m〕カツモウイノデ2.2, (以下1.2) ホソバカナワラビ, アリドウシ, フユイチゴ, オオカグマ+.2, (以下+) キジノオシダ, ジュズネノキ, ツワブキ, フモトシダ, ササクサ, ナキリスゲ, ウンゼンカンアオイ, ミヤマトベラ, イワガラミ, ヤブコウジ, ムベ, オオカナワラビ, 〔つる植物〕ハウライカズラ, キジョラン,

このアカガシ林は、福江島の高所の雲霧帯に発達する森林の原型をよく残している。福江島の山地は植林化が進んでいて、この場所以外でこの種の森林が良く残っているところは殆ど無い。白鳥神社の社叢が低地のスダシイ林の原型を伝えるのにたいして、このアカガシ林は高所の原型をよく伝えている(1988/12/2)。なお中通島の三王山(海拔349m)の山頂部にも小面積ながらアカガシ林がある。ここも貴重である。

46) 大瀬崎のシマシャジン自生地(南松浦郡玉之浦町大瀬崎)(図20)

福江島南端の大瀬崎の灯台下の海岸草地にシマシャジンが自生する。本種は韓国・済州島に自生し、日本では平戸島大志々伎とここにのみ分布する。生育密度は高い。(1989/10/2)



図20 大瀬崎のシマシャジン(キキョウ科)個体群
(1989/10/2 撮影)

47) 男女群島（国指定天然記念物：天然保護区域）（福江市）（図21）

全島が天然記念物。スダジイと欠くタブノキ-ムサシアブミ群落、モクダチバナ-マサキ群落、マルバニッケイ群落、ハチジョウススキ群落、コウライシバ群落、ハマウド群落、イワタイゲキ群落、イソヤマテンツキ群落等が発達する。詳細は外山ほか（1968）、長崎県生物学会（1973）および伊藤・中西（1984）を参照せよ。（1967/7/29-31；1983/5/10；1989/10/3）

48) 平戸以南の島嶼にみる南方系植物の自生地

国または県の天然記念物に指定されている種とその自生地を列記する。ヘゴ（奈良尾町1988/9/9，福江市増田，玉之浦町丹那，同町矢の口1995/2-図22，同町島山島1988/12/2），リュウビンタイ（玉之浦町丹那1988/12/2，同町七岳）。これらのほか，指定されていない次の種の産地（多くは北限地）も注目に値する。オオタニワタリ（福江市へぼ島一中西1993．男女群島には多産．若松町神山にも自生すると言う，要調査），ケウバメガシ（男女群島中の島一千々布1989）モクレイシ（図23）（宇久町宮の首1976/8/1），ハマナツメ（富江町和島1979/7/29），ハマトラ



図21 男女群島。南東側から女島を望む。右端の浜が前浜（1967/7/30撮影）



図23 宇久島宮の首のモクレイシ（ニシキギ科）（1976/8/1撮影）



図22 玉之浦へゴ自生地北限地帯（国指定天然記念物）（同町矢の口1995/2撮影）



図24 串島のコケセンボンギク（キク科）（1979/7/25撮影）

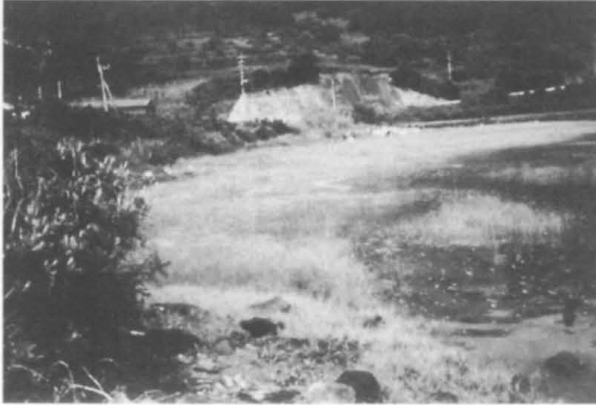


図25 岐宿町の海岸にみる塩湿地植生。シオクグ群集、ナガミノオニシバ群集、ハマサジ群集、ハマボウ群集がある (1993/8/3 撮影)



図26 玉之浦町矢の口の塩湿地植生は、岐宿町塩湿地と同様の群落がある (1995/2 撮影)

ノオ (小値賀町美良島1990/8/8, 三井楽町嵯峨の島), ノアサガオ (奈留島1988/9/8), モクタチバナ (平戸市上枯木島1992/3/8), コケセンボンギク (図24) (上五島町串島1979/7/25), ケイビランは玉之浦町七岳の岩角地が県内唯一の産地である (1986/12/6)。

49) 平戸以南の島嶼にみる海岸群落の発達

海岸の崖地群落の代表は、ダルマガク-ホソバワダン群集である。五島には各島各所に発達するので、とくには地名を挙げない。砂浜植生は、宇久島の大浜海岸 (前述) のほかに中通島の蛤浜 (有川町), 福江島の由良ヶ浜と高浜海岸 (ともに三井楽町) に見られるが、いずれも海水浴

に利用されていて、自然度はやや落ちる。塩湿地植生は、福江島の岐宿町の海岸 (図25) と玉之浦町矢の口の河口 (図26) に見られる。これらの塩湿地は開発を受けやすい沿岸部にありながら、自然植生の原型をよく残している。いずれも保護保全に値する。なお礫泥地ないし砂礫地の浜に生ずるハマジンチョウは、前記したほかにも若松瀬戸の小さな入り江に多く、福江島の三井楽の河川下流にあった群生地は架橋工事のため小さくなった。玉之浦町荒川には県指定天然記念物の個体群がある。

(いとう・しゅうぞう；〒852 長崎市文教町1-14, 長崎大学教養部)